

(2)「顎骨病変の鑑別診断 - 線維骨性病変について-」

大阪大学大学院歯学研究科 口腔病理学教室 豊澤 悟

顎骨には歯牙様または骨様の硬組織形成を伴う腫瘍および腫瘍様病変が発生する。歯牙様硬組織を伴う病変は、本学術大会の特別講演「歯原性腫瘍」にて講演頂くので、本発表では骨様硬組織形成を伴う顎骨の線維骨性病変(fibro-osseous lesions)について概説させて頂く。

線維骨性病変とは、骨様硬組織を伴った線維性結合組織が正常骨組織を置換して増生する良性の病変群を指す用語である。顎骨には、線維性骨異形成症(fibrous dysplasia)、骨形成線維腫(ossifying fibroma)、骨性異形成症(osseous dysplasia)の3病変が知られており、臨床的には、共通して顎顔面の非対称性変形や咬合異常、さらには機能障害を引き起こすが、病態経過が各々異なるためその治療法も異なる。すなわち、線維性骨異形成症の多くは骨格成長後に病変の増大が静止する傾向にあるのに対して、骨形成線維腫は放置すると継続的に腫瘍性増殖するため、前者は骨格成長後に減量術を行うが、後者は可及的早急に摘出術を行う。骨性異形成症は基本的には顎骨膨隆を引き起こさず、2次感染を起こしやすいため観血処置はなるべく避ける。従って、審美や外科的侵襲を配慮した最適治療を行うためには正確な鑑別診断が望まれるが、これらの組織学的所見は類似するため鑑別診断は困難である。そのような中、線維性骨異形成症は *GNAS1* 遺伝子(染色体 20q13 遺伝子座)の体細胞変異に起因する疾患であることが示され、*GNAS1* 遺伝子変異を利用した遺伝子診断が可能となった。本発表では、*GNAS1* 遺伝子診断に臨床およびX線画像などを加味した線維骨性病変の鑑別診断を概説したい。